

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報 第259号 2019年2月12日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2019



写真：写真部

子ども達の笑い声が聞こえるキャンパスで CONTENTS

TOPICS

- | | |
|-----------------------------|--|
| 学長からのメッセージ 1-2 | 附属学校園からのお知らせ 7-8 |
| 学生のアクティビティ 3-4 | キャンパス点描 9-10 |
| ● 大学公認サークルOchas(オチャス) | ● 高田弘子奨学金授与式を挙行了しました |
| 教員紹介 5 | ● お茶の水女子大学と国立成育医療研究センターが連携・協力に関する協定を締結しました |
| ● 藤川 玲満先生
(基幹研究院人文科学系講師) | ● 2018年度学生表彰式を開催しました |
| 卒業生紹介 6 | ● 東京都女性活躍推進大賞(教育部門)が東京都知事より授与されました |
| ● 西村 道子さん
(理学部 化学科卒業) | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

子ども達の笑い声が 聞こえるキャンパスで

学長からのメッセージ

ナーサリーから大学院までが同じキャンパスにあるお茶の水女子大学では、頻繁に小さな子ども達と出会う機会があります。子ども達が体中で自分の意思を表現している様子や、可愛い笑顔に出会って、心が癒されることもあるでしょう。私も、本館の中庭などで遊んでいるナーサリーやこども園の子ども達の姿や、学長室の窓から聞こえてくる小学校や幼稚園の子ども達の声に、疲れを忘れることがあります。子ども達の笑い声が溢れるキャンパスに身を置いているということは、なんて素敵なことなのだろうと思っています。

本稿では、現在では当たり前になっている「子育てを温かく見守り支援するお茶の水女子大学」を実現するために進められてきた取り組みを紹介します。これからの社会を担って下さる皆さんには、こういった当たり前のことさえも、決して簡単に実現できた訳ではないことや、たとえ困難なことであっても「意思があれば実現できる」ということも、知って頂きたいと思っています。そして、正しいと思ったことには、勇気をもってチャレンジして頂きたいと思っています。

若い皆さんには、まだはっきりと認識できないかも知れませんが、女性達が多様な分野で活躍し、仕事を続けていく上で、出産と育児が大きな制約となることが多い状況があります。特に、本学の卒業生が活躍している研究や教育の場など、時間的にも厳しい条件下で働く女性達が、家庭を持って働き続けることの出来る環境を作るためには、職場や家庭の積極的な協力と努力が不可欠です。

2000年初頭に、私達は、学生や女性研究者の子育てを支援するために、当時のお二人の学長のご理解の下、教員や大学院生・ポスドクの方々と共に、本学に学内保育所を作りました。現在では、様々な大学や研究機関に保育所を設置する事が当たり前になりつつあり、政府もそれを支援していますが、当時は多くの課題があって、学内保育所

の設置は簡単なことではありませんでした。

発端は1999年秋の日本学術会議の研究連絡委員会でした。そこで群馬大学の委員の方から「病院付設の保育所の増築を検討している」と聞いて、「国立の女子大学として女子教育の先頭に立つはずのお茶の水女子大学に、なぜ若い女性たちを支援するための保育所がないのだろうか」と素朴な疑問を持ちました。そして、「本学にも保育所を作りませんか」と呼び掛けたのですが、「文部省（現・文部科学省）の施設の中に厚生省（現・厚生労働省）の施設を作るのは無理な話」「居住地から離れた大学内に保育所など作っても役に立たない」「そんな予算をどう工面するつもりなのか」など、反対意見がとても多かったのです。その中で、化学科の松本勲武先生と生物学科の西川恵子先生、そして私の研究室の若い人たちが「これからのお茶の水に必須の施設だと思います」と賛同して下さったこともあって、当時の佐藤保学長にご相談に伺いました。佐藤学長は「これまでも保育所開設の提案はありましたが、いつも立ち消えになっていました。なぜ無理だったのかを検討しましょう。そのために、他の国立大学の保育所の現状を調査してみてください」と仰って下さいました。

そこで私たちは、先ず、当時99あった国立大学全てに電話をかけて、保育所についての情報を集めました。「お茶の水女子大学には医学部も病院もないのだから無理でしょう」と、けんもほろろに電話を切られてしまうこともありましたが、北海道大学の厚生課の方、金沢大学の厚生課の方と保育園長さんの親切な対応と励ましに後押しされ、99の国立大学全ての電話調査と書面による確認作業を終えて、調査報告をまとめることが出来ました。

佐藤学長はその報告を国立大学協会での議論に供され（国大協「国立大学における男女参画を推進するために 報告書」2000年）、学内に「保育施設に関する調査研究会」を、次いで「設置準備委員会」を組織して下さいました。幸い、3つの学部から数名の教員の方が手を挙げて下さり、また、私の研究室の若いポスドクや学生たちが総力





を挙げて手伝って下さって、全学的なアンケート調査も実施し、学内の需要や要望も調べ上げることができました。「文部省が設置する国立大学で保育所を設置できるのは、厚生省の施設である病院がある大学だけ。医学部も病院もないお茶の水女子大学に、厚生省の施設を作るのは土台無理」との声も、活動続ける間に少しずつ小さくなり、準備委員会で具体的な案を検討し始めた頃には文部省が「霞ヶ関保育所」を作る計画が公表されて、「無理だ」との意見はほとんど鳴りを潜めました。

2001年4月に佐藤学長からバトンを引き継がれた本田和子学長(本学初の女性学長です)は、保育所設置に熱心に取り組んで下さいました。まず、授乳とオムツ替えができる授乳室が出来上がり、明るい素敵な部屋に、サン・リオから寄付して頂いた可愛いベッドやソファ、椅子、布団などが設置されました。

さらに本田学長の「幼・保連携」の方針の下で、保育施設を幼稚園の中に作ることの検討が始まりました。そして、紆余曲折を経て、2002年に幼稚園の一角に「いずみ保育所」が出来上がったのです。「いずみ」は本田学長による命名で、「成長の源」の意味が込められています。病院を持たない国立大学では、初めての保育所でした。その後、乏しい学内予算をやりくりして、幼稚園と園庭を共有できるように職員宿舎の一部を改装した施設も出来上がって、2005年度からは大学附属の「いずみナーサリー」が開所の運びとなりました。

小さな一歩ではありましたが、このことを通じて、人の幸せに役立つことは願えば叶うこと、そしてその際に組織のトップが先頭に立って動いて下さることの重要性を学びました。

なお、2002年と言う年は、本学にとって大きな意味を持つ年でした。女子大学が持つ役割と意義について深く議論し、世界中の全ての女性たちの夢の実現を支援する大学として歩むことを決心して『学ば意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場

として存在する』とのミッションを掲げ、日本だけに留まらない教育と研究活動を開始したのも、2002年でした。GAZETTE 255号(2018年2月号)でご紹介したアフガニスタン女子教育支援を開始したのも、この年だったのです。

現在「いずみナーサリー」では、若い学生・大学院生や教職員などの子どもたち(6ヶ月～3歳未満)二十数名が保育されて居り、さらに、2015年から文京区との連携で設置された「文京区立お茶の水女子大学こども園」では3歳児から5歳児まで、約90名の子ども達が保育されています。「乳幼児がいるキャンパス」は、学生の皆さんにとっても、多様な年齢の人々が共に学ぶに優れた教育機会となっていると言えます。さらに、いずみナーサリーでは、本学の学部生と大学院生には、保育料の二分の一を奨学金として授与する仕組みも作られています。

なお、「いずみナーサリー」の設置に向けて一緒に活動してくれた若い女性研究者が、「いずみ」で子育てをしながら研究成果を挙げて、その後、他の国立大学の准教授として、当該大学での男女共同参画において大きな力を発揮しています。このことも特筆すべき成果だと思っています。

以上に述べたことは、本学の女性の活躍を支援する活動のほんの一部ですが、お茶の水女子大学では、他の大学に先駆けて、育児や介護等と両立可能な学習環境と、きめ細やかで質の高い学びと交流の場を作ること、努力して来ました。そして、嬉しいことに、それらの活動は、女性の活躍を推進する環境づくりであると共に、女性自身の意識変革や、不安や悩みの解消、自信を涵養することにも役立つ活動として、内外の注目を集めています。

2019年2月

お茶の水女子大学長 室伏 きみ子



学長からのメッセージ

学生のアクティビティ

お茶大の学生有志による大学公認サークル「Ochas(オチャス)」は、7つのチーム(スイーツ、ナーサリー、食ブレ、お茶、ファーム、インターナショナル、おみやげ)に分かれて、学内外で広く活動されています。今回はWEBニュースにもなった、企業とのコラボ商品に焦点を当てて、代表の方に誕生までの経緯をお伺いしました。



昨年Ochasでは新たなコラボレーションが実現し、2つの商品が誕生しました。

1つ目が大学の近くにあるショコラトリ- Decadence du Chocolatとコラボレーションした「お茶ネコクッキー」です。このクッキーはお茶大のお土産となる商品を作るべく、Ochasメンバーがコンセプト等を考え、商品の案出しを行い、Decadence du Chocolatに形にさせていただく、という流れで実現した商品です。お茶大の猫、お茶ネコをモチーフにしたかわいいクッキー

で、プレーン・抹茶・アールグレイの3種の味があります。実際、微音祭でOchasとして出店している「Ochas Café」で販売したところ、たくさんの方々にご好評いただきました。

もう1つが、株式会社あきんどスシローの「スシローカフェ部」とコラボレーションしたカップケーキ2種です。こちらの商品は提示されたコンセプトに沿って、私たちが商品のアイデアを出し、それをスシローカフェ部に形にさせていただきました。女子大生ならではの視点を商品に反映させ、「スノーマンのふんわりカップケー



Ochasの活動は、
ブログやTwitterでもチェックできます。
ぜひご覧ください！

1 株式会社あきんどスシローとのコラボ商品、*スノーマンのふんわりカップケーキ。2 Decadence du Chocolatとのコラボ商品、*お茶ネコクッキー。3 文京区で行われるハッピーベジタブルフェスタ、通称「ハビベジ」でのパネルシアター。4 株式会社あきんどスシローとのコラボ商品、*いちご帽子のカップケーキ。5 微音祭での*Ochas Caféの様子。6 株式会社あきんどスシロー店舗前で記念撮影！



●ブログ
<http://ochasblog80025781.doorblog.jp/>
●Twitter
<https://twitter.com/ochaas>



Ochasのキャラクター
チャコちゃん

キミと「いちご帽子のカップケーキ」という見た目にもかわいらしいカップケーキが誕生し、全国の店舗で販売しました。スシローカフェ部の試作会やミーティング、本社で行われた新商品プレゼンにも参加させていただくなど、たくさんの貴重な経験をすることができました。

1つの商品が完成するまでの工程を経験し、今までとは異なる視点からのものの見方を学ぶことができました。学生という立場で、このような経験ができたことを本当に嬉しく思います。また、

Ochasのことを知っていただき、商品をたくさんのお客様に楽しんでいただくことで、「食べる幸せ」を広げることができたのではないかと感じています。

Ochasの活動はたくさんの企業の皆様、大学職員の皆様、先生方や先輩方、そして商品を手にとってくださいお客様のおかげによって成り立っています。このことを忘れることなく、これからも「食べる幸せ」を社会に向けて発信し続けるために活動に取り組んでいきます。

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は2017年4月に着任された基幹研究院人文科学系講師の、藤川玲満先生にお話を伺います。藤川先生は、学部では文教育学部言語文化学科、大学院では比較社会文化学専攻にご所属で、日本古典文学・近世文学を講じていらっしゃいます。



近世中後期の作者と 文芸形成を考える

Reman Fujikawa
藤川 玲満

Q ご出身、ご経歴をお聞かせください

神奈川県横浜市の出身です。学部・大学院ともにお茶の水女子大学を卒業しました。日本文で近世（江戸時代）文学を専攻しました。博士後期課程修了後、お茶大のリサーチフェロー、日本学術振興会特別研究員PDを経て、2010年にノートルダム清心女子大学（岡山市）の文学部日本語日文学科に赴任し、7年間勤めました。そして、2017年4月にお茶大に着任しました。

Q 先生のご専門ご研究について教えてください

私は、近世中後期の上方（京都・大阪地方）の文学と出版を研究しています。とくに、秋里籬島（あきさとろう）という作者を研究対象の中心としてきました。

秋里籬島の代表作は、『都名所図会』（みやこめいしよずえ、安永9年（1780）刊）という京都の案内書で、山城国の名所旧跡の解説記事に、俯瞰図と風俗画の挿絵を入れたものです。歌枕の古歌や寺社・旧跡の故事伝承を集めたり、土地の風俗に漢詩や俳諧を添えて描くなど、非常に文学性豊かな作品です。近世中期には、文運東漸（ぶんうんとうぜん）と言って、文化の中心が上方から江戸へと移っていきましたが、この作品は、そのような時期を経た上方で出版されて、ベストセラーと言えるような

流行の書となりました。私は、この『都名所図会』について典拠研究などを行いました。

そして、作者の秋里籬島には、他にも俳諧書や読本（よみほん、近世小説の1ジャンル）など多岐に渉る著作があるのですが、従来伝記には不明点の多い人でした。そこで、俳諧や狂歌などの籬島の文学活動の経歴や文壇との関連を明らかにすること、また、江戸時代には出版文化のなかで書物が制作されていきましたので、彼の著作の出版書肆（板元の本屋）の営業史の解明などを試みてきました。こうしたことを足がかりに、籬島の周縁を越えて、同時代の文芸形成の構造や知識体系を見出していくことを目指しています。



Q 日本文学を研究しようと思われたきっかけは？ またお茶大ではどのように日文学を学ばれましたか？

小学生の頃から国語がとても好きでした。そのことが今の自分の道に繋がっていると思います。そのなかで、高校時代に「古文」がとりわけ興味深く、これを解るようになりたい、もっと知りたいという思いを抱いて古典文学を志しました。

そうして進学したお茶大の日文では、卒業論文から博士後期課程修了まで、市古夏生先生のもとで近世文学を専攻しました。先生には、

文学作品を考究することとともに、近世の出版史学や書誌学もご教授いただき、文学の形成環境を考えることの重要性を認識しました。

Q お茶大の印象はどのようなお持ちですか？ また、お茶大生にメッセージを頂けませんか？

昨年度着任しましたとき、学内のいたる場所で、学生の頃のさまざまな場面が甦ってきて、感慨深く思いました。同時に、カリキュラムの複数プログラム選択履修制度など、新しく覚える事柄もたくさんありました。

お茶大生の皆さんは、常に真摯に勉学・研究に努めておられて、演習発表・論文・レポートなど、大変充実した成果を見せてくださいます。また、折々の日文コースの行事でも大きな力を発揮してくださって、ほんとうに頼もしく思います。

お茶大には、じっくりと自分の研究に向き合うことのできる環境が備わっていると思います。学生の皆さんには、そうした環境を存分に活かして学問と思索を深めるとともに、学界をはじめ学外の文化のなかに、勇気を持って踏み出して行っていただきたいと願っています。

■ インタビューを終えて

藤川先生の研究室の書棚には研究書が整然と並び、お部屋全体も整理整頓が行き届いていて感動いたしました。テーブルの上には学生さんから贈られたという小さいウサギのぬいぐるみや素敵な置物が飾られ、明るく居心地のよい雰囲気です。藤川先生のお人柄が偲ばれる研究室でした。ご多忙のところ、丁寧なご対応をいただきありがとうございます。

文責：基幹研究院人文科学系准教授
小松 祐子

卒業生紹介

カナダの医療現場で働く

将来の仕事を意識しながら どのような学生生活を 送っていましたか

将来は化学の専門性を活かした仕事に就きたいと意気込んで入学したものの、すぐに自分の方向性を見失ってしまい、4年間悩み迷う日々でした。試験や課題はなんとかこなしていましたが、超氷河期ということもあって就職も決まらず、卒業する頃にわかったのは「私は化学で食べていくことはない」ということでした。悩みながらの学生生活でしたが、化学科は少人数だったおかげか良い友達に恵まれ、今でも仲良くしています。

また、在学時はあまり意識していなかったのですが、理系でも女性教諭が多く、女性が自立し活躍するのが自然な環境だったことに少なからず影響を受けたと思います。カナダはジェンダーギャップの小さい国ですが、それでも「ガラスの天井」はまだありますし、昨今の日本のニュースを見ると、20年前のお茶大の方が今の日本より進んでいたのではと思うことがあります。



現在のお仕事に就くまでの 経緯を教えてください

卒業して数ヶ月後に教材やテストを作る編集プロダクションに就職、その後、理系分野の本の編集で2つの出版社に勤務しました。化学は直接仕事には関係しませんでした。理系という大きな枠で仕事に繋がったと思います。

仕事とは別に、星野道夫（アラスカをテーマにした写真家）の影響を受けて北方先住民の文化に興味を持ち、アラスカを何度か訪れました。旅行では物足りず長期滞在したいと考えるようになったものの、英語やビザ、お金の問題もあり、半ば諦めていました。そんな折に、アラスカに隣接したカナダなら、ワーキングホリデーで1年間働きながら滞在できると知ったのが最初にカナダに行くことになったきっかけです。

現地ではハウスキーパーをして滞在費をまかないながら、先住民の友人からいろいろなことを教わり、滞在が終わりに近づく頃には、もっと彼らのことを知りたい、カナダに滞在したいという

Nishimura Michiko 西村 道子

Registered Nurse (正看護師) 勤務地：カナダ サスカチュワン州

東京都出身 1996年4月 お茶の水女子大学理学部化学科入学
2000年3月 お茶の水女子大学理学部化学科卒業



気持ちが強くなっていました。ただ、1年滞在中も英語は全く上達せず、人に頼ってばかりなのは自分の理想とする生き方とは違うと思い、冷静に考えるため一旦帰国することにしました。日本で働きながら1年ほど考え、やはりカナダに戻りたいという結論に達し、永住権取得を真剣に考え始めたのもこの頃です。当時の仕事で尊敬できる医師とお話しさせていただく機会があり医療に興味を持っていたこと、また看護師なら永住権を得やすいだろうという打算もあって、まずは2年で資格を取れるLPN(准看護師)の学校に留学しました。ちなみに、この打算はそうでもなかったことが後に判明します(笑)。

永住権取得後は働きながら大学に戻り、現在はRN(正看護師)として勤務しています。

現在のお仕事内容を 教えてください

最近までフルタイム勤務していたのが内科です。入院の手続き、血圧・体温などの測定、アセスメント、投薬、清拭や食事の介助など、日本の看護とほぼ変わらない仕事内容ではないかと思っています。コミュニケーションは仕事の大きな一部で、患者さんやご家族はもちろん、医師、理学療法士、栄養士、呼吸療法士、言語療法士、ソーシャルワーカーなど、全員と情報が共有されているかの確認も必要です。カナダは移民の多い国で、患者さんにも同僚にも文化背景の違う人が多くいます。また、移民・難民だと英語を話せない方もいるので、言葉だけではなくコミュニケーションも重要です。医療は日進月歩で勉強も欠かせません。カナダの看護師免許は更新が毎年あり、何を勉強したかというのを問われることもあります。患者さんの命、ご家族の人生に関わるので大変なこともあります。その分やりがいもあります。RNになり責任も重くなりました。キャリアの幅を広げるため、この冬から精神科でも働くようになり、今後は外科でも働きたいと考えています。看護は病院だけではなく、トラベルナース、国際的な支援活動など様々な分野があり、私は最終的には地域医療に携わりたいと思っています。

在学生へのアドバイスや メッセージをお願いします

「常識」に囚われないで欲しいと思います。私は最初の渡加が30歳、留学が33歳、RNになったのは41歳。日本ではあまり見ない経歴です。でもカナダにはいろんな人がいます。最初の留学先で最高齢のクラスメイトは入学時54歳でした。2017年まで通っていたこちらの大学には、年齢や肌の色の違いはもちろん、シングルマザーや車椅子の学生、盲導犬をつれている学生もいましたし、実習先のホームレス支援プログラムには大学に通っている元ホームレスの方もいました。看護学科の歴代最高齢の学生は卒業時に96歳だったそうです。人には可能性がたくさんあるのだと、カナダに来て思うようになりました。日本も外国人労働者の受け入れなど国際化が加速的に進み、今までとは違うことが「普通」になっていくかもしれません。

自分の人生の選択・決定をするのは自分自身です。もし本気で目指す事があるなら、周りの声や人と違うということに臆さず、自分の情熱を大切にしてください。また、たくさん本を読んだり、お芝居や映画を観たり、旅をしたり、アルバイトしたり、友人と話したりしてみてください。視野が広がり、大事な礎となると思います。

人生は思い通りに行かないかもしれませんが、でも、何か自分の思い通りにいかなくても、それは失敗ではなく次へ進む大事な経験です。大学時代、悩んでいる私に、先生が「人は何度でもやり直せる」と言って下さったのを今も思い出します。現在は学生時代には思いもよらなかった仕事をしていますが、自分で考えながら道を切り開き、充実した日々です。

文責：基幹研究院自然科学系教授 森 義仁

わたしのオフタイム

最近は英語の勉強をしておいています。また、ずっと追いつけているテーマである先住民関連のほか、カナダの社会問題（貧困や差別など）への関心が高まり、そういった本やニュースをよく読んでいます。

附属学校園からのお知らせ

～小学校便り～

2年生

めぶく収穫祭



1学期にキュウリ、エダマメ、ピーマン、トウモロコシ、トマト等、自分たちで育てたい野菜を決め、栽培をしました。「収穫した野菜はどうする?」と話し合っていると、「トマトでピザをつくってみたい!」という声が上がりました。

秋の収穫祭に向けて、夏休み中は、鉢を持ち帰り、家でも栽培を続けました。保護者の皆さまにも協力して頂き、実ったトマトは冷凍保存しておきました。

いよいよ2学期。ピザを焼く窯は各ファミリー(生活班)で、段ボールの内側にアルミホイルを貼って作りました。アルミホイルを貼る際、銀で埋まっていない小さな隙間

留学生との
交流会

“Welcome to ★ Ocha-sho!”



教室に入ってきた各国からの留学生たちを目の前にした子どもたちからは、自然と歓迎の拍手がわき起こります。近年毎年行われている本学の留学生との交流会。今年は5,6年生の子どもたちが20名の留学生をお迎えしました。今回の交流会には、韓国、ベトナム、タイ、台湾、香港といった日本のお近くの国だけでなく、トルコ、クウェート、イタリア、フランス、ポーランドからも留学生がみえました。

10月に行われた6年生との交流会では、日本の文化(伝統的なものから現代的なものまで)やお茶小の学校生活を紹介したり、同じテーマについて留学生の出身国の様子を教えていただいたりしました。はじめは、「楽しく交流して仲良くなりたい!」「でも、歳も違うし、好きなものや興味も違う外国の人と仲良くなつてくれるのかな…」と期待と不安とが入り交じった様子の子供たちは、グループに分かれて留学生と対面すると、緊張した面持ちで自己紹介をしていました。しかし、テーマについて準備してきたことを伝え始めると、





も綺麗にアルミホイルを貼りたい子、「もうある程度、貼れてるじゃん!」と違うことに取り組みたい子など、どちらの子どもたちの意見とも妥当性のある意見が対立していました。どちらが譲るか、折衷案を見出すか…どうすれば納得できるかを体感的に学んでいた様に思います。

いよいよ、活動当日。保護者のご協力も得て活動に参加してもらいました。ピザソースは、収穫したトマトを他学年からも提供してもらいました。子どもたちが栽培したトウモロコシも入れ、おいしいピザソースができました。

ところで、段ボール窯用の炭は、教員が一斉に火おこしをしていたのですが、轟々と燃えさかる大量の炭(何と500℃!)を見た子どもたちから、「空気がゆらゆらしている!」という声が上がりました。陽炎の存在に気づいたようです。続いて「影に移っているほうがよく見えるよ!」と言った子がいました。子どもはいろんな所からおもしろい発見しているんだと改めて感じました。火の不思議な力に魅了されていたのか、炭をずっと眺めて過ごしている子もいて、大変ほほえましかったです。

主役のピザはうまく焼き上がり、保護者の皆さまとおいしく楽しく学びながら、一日を過ごすことができました。

「一緒にやってみませんか」と留学生に体験してもらったり、「これ、わたしの国にもあります」と留学生から声をかけてもらって「本当ですか!」と驚いたりしながら、すぐにその距離が縮まっていきました。留学生がなかなか日本の小学校に入る機会がないことを知った子どもたちが「お茶小ツアー」を組み、6年間過ごしてきた校舎や学校生活を意気揚々と伝えようとする姿も、とてもほほえましいものでした。

終わったあとには、「もっともっとお話ししたかった!」「途中から留学生ということを忘れてしまうくらい、自然にお話できて嬉しかった!」という素直な声が挙がるなど、国の垣根を自然と越えてしまう子どもたちの姿がありました。



附属学校園での出来事 (2018年10月～12月)

【いずみナーサリー】

10月

- 避難訓練 (火災)
- 親子で遊ぶ会

11月

- いずみナーサリー同窓会
- COSMOS・ECCELL 共催企画「子どもの世界を見てみよう」
- 個人面談
- 避難訓練

【附属幼稚園】

10月

- 運動会予行
- 運動会
- JICA「乳幼児ケアと就学前教育」1日研修
- 幼小合同避難訓練
- 誕生会
- 4歳児 親子で遊ぶ日
- 5歳児 さつまも掘り
- 3歳児 遠足(小石川公園)

11月

- 避難訓練
- 誕生会
- 創立記念の集い

12月

- もちつき
- 終業式

【附属小学校】

10月

- 衣がえ
- 避難訓練
- 防災訓練(教職員, 5年)
- 学校説明会
- 中西部アフリカ幼児教育研修会参観
- かがみ会バザー
- サツマイモ掘り(3, 4年)
- 収穫祭(2年)
- 留学生との交流会(6年)
- 校外学習(1, 3, 4年)
- 給食試食会

11月

- 避難訓練
- 秋まつり(1年)
- 音楽会
- ダイコン掘り(2, 5年)

12月

- 保護者会(各学年)
- 終業式

12月

- クリスマスあそび
- 避難訓練

【附属中学校】

10月

- 身体測定
- 生徒会選挙
- 公開研究会

11月

- 1年郊外園(サツマイモ収穫)
- 任命式
- 全学避難訓練
- 期末テスト
- 創立記念日

12月

- マラソン大会
- 保護者会
- 2学期終業式

【附属高校】

10月

- 自治会総会・選挙
- 2学期中間考査
- SGH台湾研修
- 3年学力テスト
- お茶大・筑波大附属高校合同キャリア講演会
- 1年農場実習(サツマイモの収穫)

11月

- ダンスコンクール
- 3年学力テスト
- 福島県モニターツアー「福島学宿」
- 避難訓練
- 第2回SGH公開授業
- 第2回保護者授業参観
- 全日本高校模擬国連大会
- 創立記念日

12月

- 2学期期末考査
- GPSアカデミック
- SGH高校生全国フォーラム
- 東工大ウィンターレクチャー
- ハーベイマッドカレッジ講演会
- SGH自国文化理解講座
1年生:歌舞伎、2年生:文楽
- SGH「持続可能な社会の探求」説明会
- 1年 Google 社訪問
- 終業式

附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

高田弘子奨学金授与式を挙行了しました・・・・・・・・・・・・・・・・

2018年11月6日、2018年度高田弘子奨学金授与式を挙行了しました。

高田弘子奨学金は、本学卒業生の高田弘子様からのご寄附により、昨年度から開始された奨学金です。寄附者の高田弘子様は、1957年3月に本学文教育学部を卒業され、私立中学校、高等学校の世界史の教員をされておりました。

このたび、海外留学後も研究を継続する意志をもつ大学院生、また本学が推進する重点領域の研究に従事する若手研究者に対し、専門的な研究に専念できるようにとのご意向により、奨学金を授与することとなりました。審査は大学院生と若手研究者毎に行なわれ、今年度は大学院生2名、若手研究者1名が受賞しました。



ご挨拶をされる高田様

式典では学内教職員臨席のもと、室伏学長から賞状を授与されました。

また、学長及び高田弘子様からお祝いと励ましの言葉がかけられ、奨学金受賞者が謝辞と今後の抱負について挨拶を述べました。



授与式の様子

お茶の水女子大学と国立成育医療研究センターが 連携・協力に関する協定を締結しました・・・・・・・・・・・・・・・・

国立大学法人お茶の水女子大学（東京・文京区、室伏きみ子学長）と国立研究開発法人国立成育医療研究センター（東京・世田谷区、五十嵐隆理事長）は、2018年11月19日に、連携・協力に関する協定書を締結し、あわせて、同日に調印式を行ないました。

本協定は、相互に協力可能な分野において、それぞれの研究及び人材育成に関する具体的な連携・協力を、互恵の精神に基づき効果的に推進することにより、わが国の成育医療研究の発展に寄与することを目的とし、調印式にて協定書を締結いたしました。

この協定により、今後、共同研究等の研究協力、研究交流及び人材交流、臨床研修の実施、研究施設・設備の相互利用等について、連携・協力を進めてまいります。



調印式の様子 右：室伏きみ子学長、左：五十嵐隆理事長

2018年度学生表彰式を開催しました

2018年12月10日に2018年度学生表彰式を開催しました。学生表彰は、学業・学術研究活動分野、課外活動分野、社会活動分野で特に顕著な業績を挙げ、かつ学界又は社会的に高い評価を受けた者、本学の名誉を著しく高めたと認められる者に対し、それを称え賞するものです。

2018年度は成績優秀な学部4年生5名、研究において顕著な業績を挙げた大学院生1名、課外活動や社会活

動において功績を挙げた学生2名及び1団体に対して、関係教職員臨席のもと学長より表彰状と記念品が贈られました。



表彰状と記念品の贈呈



表彰式の様子

東京都女性活躍推進大賞(教育部門)が 東京都知事より授与されました

2019年1月16日に都庁第一本庁舎7階ホールにおいて、平成30年度東京都女性活躍推進大賞の贈呈式が行われ、室伏さき子学長に東京都の小池百合子知事より賞状と盾が授与されました。受賞者には小池知事より祝辞があり、その後鹿嶋敬大賞審査会長より講評をいただきました。最後は都知事と審査会長を囲んでの記念撮影があり和やかな雰囲気の中、贈呈式は終了しました。

この度の授賞は本学が取り組んできた研究者への支援制度や生涯学習講座等の取組みにより優れた女性リーダーを育成してき

たことが評価されたものです。引き続き本学のミッションであるグローバルに活躍できる女性リーダーの育成を推進して参ります。



小池都知事から室伏学長へ副賞の盾の贈呈



本学の取組みを紹介するパネル



都知事と審査会長を囲んでの記念撮影



写真：写真部ほか

お茶の水女子大学学報 第 259 号

▽発行日：2019 年 2 月 12 日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

企画戦略課広報企画担当

電話：03-5978-5105

FAX：03-5978-5545

E-mail：info@cc.ocha.ac.jp

URL：http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。